

大腿骨近位部骨折に対して 入院後5日以内に手術を行った割合

87.1 %

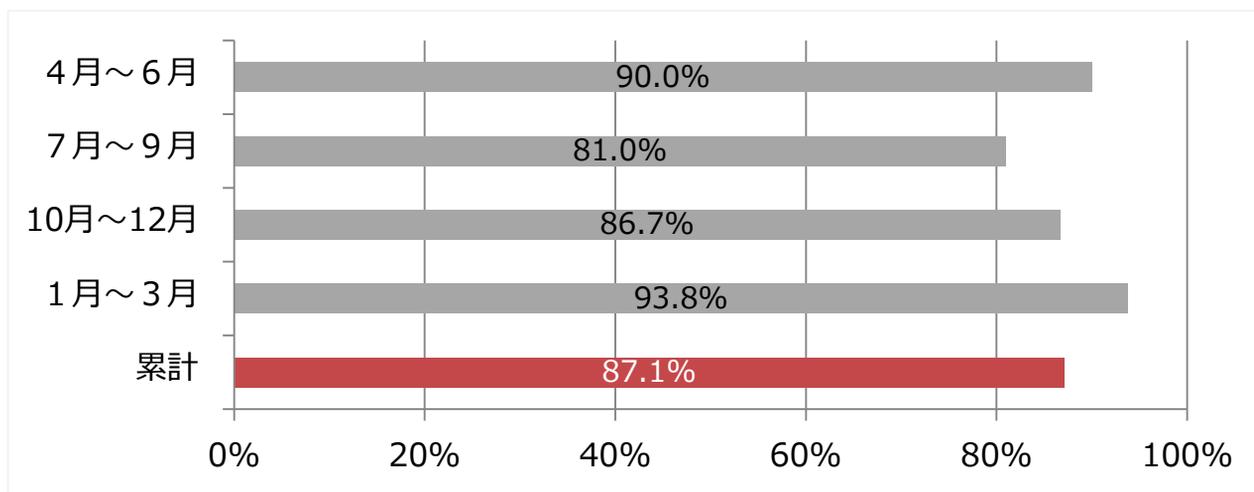
(平成31年4月～令和2年3月)

指標の説明

大腿骨近位部骨折（頸部骨折、転子部骨折、転子下骨折）は骨粗鬆症に関連する脆弱性骨折（軽微な外力で発生する骨折）の中で、歩行能力の直接的喪失という観点から特に重要な骨折です。また、生命予後の悪化や寝たきりの原因ともなり得ます。治療に関しては原則として手術が選択されますが、手術を行うまでに受傷後から5日以上経過すると院内死亡のリスクが増大するという報告もあります。したがって、合併症等でやむを得ない場合を除き、できるだけ早期に手術を行うことが推奨されています。

本項では、大腿骨近位部骨折で入院された患者に対して、入院後5日以内に手術を行った（行えた）患者の割合を算出し提示しています。

(対象症例数：62例)



値の算出方法

(入院日を含め5日以内に手術を行った件数) / (大腿骨近位部骨折での入院総件数×1) × 100 (%)

※1・・・最終的に手術を行うことができなかった症例は除外

考察

今回の調査の結果、大腿骨近位部骨折に対して、その51.8%では入院後5日以内に手術を行うことができていました。5日を超えた要因としては、心臓疾患に対する精査が必要であったこと、入院時すでに肺炎や尿路感染症を併発していたこと、糖尿病のコントロールが不良であったことなどが挙げられました。

本骨折は高齢者に多いため、何らかの全身合併症を有している患者さんが大半ですが、今後も麻酔科や当該専門科医師と連携し、入院後可及的早期に安全に手術が行えるよう努めてまいります。